

フランス革命にかぶれた父ジュゼッペ

幼年期のロッシーニに関する逸話は、その愛らしさで周囲から「小さなアドニス (il piccolo Adone)」と呼ばれたという以外、なにも残されていない。けれども幼いロッシーニの眼には、濃紺の三角帽をかぶり、赤い折り返しの紺色の制服を着た父ジュゼッペの姿が焼き付いていたことだろう (ジュゼッペはこの制服を着て広場でトランペットを吹いた)。家のすぐそばに大聖堂と複数の教会があり、礼拝ではオルガンの演奏も聴くことができた。ジュゼッペは軍楽隊の奏者も務め、ペーザロの太陽劇場オーケストラのメンバーとして 1790 年謝肉祭から 97 年秋までの 8 年間に、チマローザ、パイジェッロ、アンフォッシ、ガルツピなどの作曲したオペラ 27 作の上演に関与した可能性がある¹。だが生活は貧しく、二部屋しかない部屋の一つを又貸ししなければならなかった。

そんな一家に暗い影が忍び寄る。フランス革命の余波がイタリアに達し、ペーザロに大混乱を引き起こすのだ。パリでは 1789 年に大革命が勃発し、ロッシーニの生まれた 1792 年にはフランスとオーストリアの間に戦端が開かれた。同年フランスは王政廃止を決議して共和国を宣言 (第一共和政)、1796 年にはナポレオン (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) がイタリア方面軍の最高指揮官となって北イタリア侵攻を開始し、フランス軍は同年 5 月にミラーノ、6 月にボローニャを制圧した。ヴィクトル・ペラン将軍率いるフランス軍のペーザロ入市は 1797 年 2 月 5 日、翌日にはナポレオンも町に足を踏み入れた (2 日後、ナポレオンはフェーノに向けて発つ)。(図 13)

ペーザロの行政官、法王特使と司教はいち早く町から逃げ出したが、要人と市民の大半は留まり、フランス軍に恭順の意を表わした。それは外国支配に慣れたイタリア人の処世術でもあったが、政変を喜ぶ者も少なくない。ロッシーニの父ジュゼッペもその一人で、公務員の彼は占領軍の行事に参加を求められ、占領 12 日後の 2 月 17 日には自由の木の祭り (革命記念の植樹祭。図 14) の旗振り役を務め、6 スクードの報酬を得た。革命成就を宣伝するこのイベントでは教皇ウルバヌス 8 世の像が引き倒され、宮殿から貴族の家紋が剥ぎ取られた。だが、ジュゼッペの熱狂は長く続かない。自由の木の祭りの 2 日後、ナポレオンはトレンティーノ条約を結んでペーザロを教皇領に移譲したからである。そしてフランス軍が 4 月 6 日に撤収すると、ペーザロに教皇政府が復活した。

図 13 1796 年のナポレオン(アントワーヌ・ジャン＝グロ画。部分) 図 14 自由の木の植樹(J-B. ルシュール画、1790 年)



困った立場に置かれたのが、ジャコビーノ (giacobino イタリアのジャコバン主義者) として振舞ったジュゼッペである。8 ヶ月後の 12 月 13 日に市のラッパ手と屠殺場の検察官を解雇されるまでの間、一家が居心地の悪い思いをしたであろうことは想像に難くない。だが、良くも悪くも歴史は繰り返す。ジュゼッペが解雇された一週間後には、再侵攻したフランス軍がペーザロの城壁の外に迫っていたのだ。後に作成された警察調書の中で証言者たちは、その日ジュゼッペが仲間を引き連れ、「共和国万歳!」「圧制者たちに死を!」「未来の男爵たちの時代は終わった。もう泥棒の時代じゃない!」と叫びながら住民を叩き起こした、と供述している²。12 月 22 日未明、夜陰に乗じて城門を開いてフランス軍を導いたジャコビーノの首謀者の一人がジュゼッペだったのである。翌 23 日ペーザロはフランス軍に再占領され、ほどなくチザルピーナ共和国 (ナポレオンがカンポ・フォルミオ条約で成立させた傀儡国家) に編入された。

年が明けて政局が安定すると、ジュゼッペは謝肉祭に愛国者たちが上演した劇《カプアの攻略 (La presa di Capua)》に役者として出演した。4 月には広場で市民たちを前に、次の決まり文句による誓いが表明された——「私こと〇〇は、不可侵である憲法への遵守を誓う。私は諸王の、貴族階級の、寡頭政治の政府を永遠に憎み、いかなる外国支配もけっして許容しないと誓い、自由、平等、共和国の維持と繁栄に全力を尽くすものである」³。

この誓いを表明したジュゼッペは、以前にも増して大胆な行動をとり始めた。自宅の外壁に「真の共和主義者、市民ヴィヴァツァの住居」と貼り紙し、愛国的な詩に「市民ジュゼッペ・ロッシーニ、ヴィヴァツァ。愛国的激情にかられ、満たされ、彼の手による共和国讃歌を真の民主主義者に捧ぐ。彼に靈感を与えしは、アポロにも自由の女神たちにも増して祖国愛なり」と印刷させたのだ。6 月 17 日、フランス共和国とチザルピーナ共和国の協定批准を祝う行事での活躍は、2 日後の『ペーザロ新聞 (Gazzetta di Pesaro)』に実名入りで掲載されている——「か

くも美しき日の暁、我らの最も優れた愛国的指導者たちは、彼らの住居の下で吹かれたトランペットの音で目を覚ました。演奏させたのは、市民ヴィヴァツァのあだ名で知られる当市に雇われしトランペット奏者、素晴らしき愛国者ロッシーニである」(6月19日付)⁴。その頃ジュゼッペは軍楽隊の奏者や雑務をして共和国政府から日当を得ていたが⁵、年々高騰する家賃に足らず、一家はグランデ広場に面したバヴィエーラ家の住居 (Palazzo Baviera) に移った。

6歳になったジョアキーノは公立小学校に通い、元フランチェスコ修道会士ルイーダ・フロンティーニ (Luigi Frontini,?-?) に読み書きを学び、警備兵の軍楽隊でリストロ (listaro [トライアングルまたは小太鼓奏者]) を務めて報酬を得た (1798年4月)。ロッシーニ少年の自慢は、母アンナの美しさだった。後に彼は友人エドモン・ミショット (Edmont Michotte, 1830-1914⁶) に対し、「母はロマーニャの若い女性の中で最も美しい一人」「その美しさはラッファエッロの描いた聖母の中でも最も清純なタイプ」「超自然の存在のように見えた」と述懐している⁷。そして母を「聖なるマンマ (Santa mamma)」「聖母 (Santa Madre)」と呼ぶジョアキーノは、司祭から「聖母と呼んでいいのは天におられるただ独り、聖母マリアさまだけ」と諭されたが、「聖母より美しい人はこの世にいない」と言われた少年は、「天国に行って聖母さまが本当にぼくのママよりきれいだったら、ぼくは一生泣いて暮らすよ」と答えたという。ジョアキーノを一番喜ばせたのは、町の人たちから「ママそっくり」と言われることだった。そして美人の母をいつも見ていたので、「醜い女性に恐怖をおぼえるようになった」とミショットに語っている。

オペラ歌手になった母アンナ

これに先立ち、母アンナの生活にも大きな変化が生じていた。1797年4月、教皇政府の復活で立場が危うくなったジュゼッペが、美しいソプラノの声をもつ妻をオペラ歌手にしようと考えたのだ。教皇国家は女性の舞台出演を禁じていたが、フランス軍の再侵攻でチザルピーナ共和国に編入され、女性歌手の舞台出演が可能になった。激動の時代にあつて人々は娯楽を欲し、数多くの喜歌劇が上演されていた。

フランス軍の再占領から3日後の12月26日、アンナはペーザロ近郊アンコーナのフェニーチェ劇場 (Teatro della Fenice) で上演されたパイジェッロ作曲《宿屋 (La locanda [Il fanatico in berlina])》に、セコンダ・ドンナ [二番手女性歌手] としてデビューした。続いてチマローザ作曲《滑稽な恋人たち (Gli amanti comici)》とマルティン・イ・ソレル作曲《行儀の良い気まぐれ娘 (La capricciosa corretta)》も上演されており、マリーア・アンナ・ロッシーニ (Maria Anna Rossini) の芸名による出演が確認されている (図 15)。



図 15 舞台衣装の母アンナ

アンナ・ロッシーニの出演歴(1797年12月~1808年秋)
1797/98年謝肉祭、アンコーナのフェニーチェ劇場:パイジェッロ《宿屋 (La locanda)》、チマローザ《滑稽な恋人たち (Gli amanti comici)》、マルティン・イ・ソレル《行儀の良い気まぐれ娘 (La capricciosa corretta)》
1798/99年謝肉祭、フェッラーラの国立劇場(テアトロ・ナツィオナーレ):マイル《秘密 (Il segreto)》、ガルディ《失くしたスリッパ (La pianella perduta)》、チマローザ《寛大な敵 (I nemici generosi)》
1799年夏、ポローニャのマルシーレ・ロッシ劇場:[チマローザ]《破産した興行師 (L'impresario in rovina)》、[ガッツァニーガ]《ドン・ジョヴァンニ (Don Giovanni)》、[ガルディ]《失くしたスリッパ (La pianella perduta)》註:タルツィ劇場にも出演。
1799/1800年謝肉祭、イエージのコンコルディア劇場:ポルトガッロ《移り気な才女 (La donna di genio volubile)》[?], [チマローザ]《寛大な敵 (I nemici generosi)》
1801/02年謝肉祭、イモラのコムナーレ劇場:フィオラヴァンティ《田舎の女歌手たち (Le cantatrice villane)》
1803年夏、イモラのコムナーレ劇場:モスカ《からかわれた興行師 (L'impresario burlato)》
1803/04年謝肉祭、ラヴェンナのコムニタティーヴォ劇場:ヴァイグル《水夫の恋 (L'amor marinaro)》、?《カロリーナ・ソビエスキ (Carolina Sobieschi)》、ガッツァニーガ《双子 (I due gemelli)》
1804年4月22日、イモラのコムナーレ劇場(アッカデーミアの演奏会)
1804年秋、レッジョ・エミーリアのプブリコ劇場:モスカ《からかわれた興行師 (L'impresario burlato)》、マイル《なんたる奇人 (Che originali)》
1808年秋、バーニャカヴァッロのコムナーレ劇場:マイル《なんたる奇人 (Che originali)》
註:他にも1798年春イエージ、1799年フォッソンプローネ、1800年謝肉祭ポローニャ、1800年もしくは01年ファーノ、1805年セニガッリア、1807年ロヴィーゴの劇場に出演した可能性があるが、具体的な情報を得られない。

満足したジュゼッペはみずから興行師をかってでペーザロでのオペラ上演を試みたが、経験不足から失敗を喫した。けれどもアンナは1798/99年謝肉祭にフェッラーラ国立劇場 (Teatro Nazionale) でプリマ・ドンナに昇格し(以後アンナ・ロッシーニとして出演)、ボローニャ、イエージ、イモラ、ラヴェンナ、レッジョ・エミーリア、バーニャカヴァッロの劇場にも出演した。確認できる出演は15作で、活動は1808年まで断続的に続いた(すべて喜歌劇。別記の出演歴参照)⁸。アンナは楽譜を読めず、夫がギターを弾きながら歌うのを聞いて音楽を覚えたが、ロッシーニは母がすぐに覚え、その声は「彼女の姿さながらに自然かつ表情豊かで、美しく、優しさに満ち、甘美」だったと述べている⁹。ロッシーニによれば、当時の歌手の8割は楽譜が読めなかったという¹⁰。後に彼は、「もしもフランス軍のイタリア侵攻がなかったら、私は薬屋か油売りになっていただろう」と語ったが¹¹、その運命は母がオペラ歌手となったことで開けたと言って良いだろう。後述するように、ロッシーニの音楽のキャリアはボーイソプラノ歌手として母と共演することから始まるのである。だが、幸せな日々は長く続かない。一家はまたしても、予期せぬ政治の荒波に翻弄されるのである。

父の投獄、ボローニャでの生活 (1799~1801年)

1799年6月、オーストリア=ロシア連合軍の巻き返しによりフランス軍の敗走が始まった。同月30日にはオーストリア軍がボローニャを制圧、ほどなくペーザロにも旧政府が復活する。同年夏、ロッシーニの母アンナはボローニャのマルシーリ=ロッシ劇場 (Teatro Marsigli-Rossi) に出演していたが¹²、9月初めの上演後、同じ劇場でコロノ・ダ・カッチャ奏者を務めるジュゼッペが「君主に対する過去の反乱事件の最も大胆な首領の一人」として逮捕された。そして半月間の尋問を終えると身柄はペーザロに移送され、コスタンツァ城塞 (Rocca Costanza 図16) の牢獄で明日をも知れぬ日々が始まった。



図16 コスタンツァ城塞

突然犯罪者の息子になったジョアキーノの胸中は、いかばかりであったろう。父が投獄されたコスタンツァ城砦は、一家の住まいの目と鼻の先なのだ。アンナは夫の釈放をペーザロとアンコーナの有力者に働きかけて功を奏さず、息子の世話を姑アントーニアと叔母ルチアに託して歌手活動を続けた。そして1790/1800年謝肉祭に出演したイエージのコンコルディア劇場 (Teatro Concordia) では、同地の音楽愛好家たちから頌詩集『ペーザロ人、アンナ・ロッシーニ夫人の格別の功績に寄す (Al merito singolare della signora Anna Rossini Pesarese)』を献呈されている¹³。

ロッシーニ伝の著者ラディチョッティは、ペーザロに残されたジョアキーノが「同じ年頃の仲間と徒党を組み、悪戯をしながら一日の大半を町をうろついて過ごした」と記している。家の窓から石を投げて友人に怪我をさせ、教会の聖具室に忍び込んで礼拝用のワインを飲み干すなどの悪さをして祖母と叔母を困らせたのも、両親不在の寂しさが原因であろう。当時の遊び仲間フランチェスコ・ジェンナーリ (Francesco Gennari) は、当時の思い出をこう振り返る——「私の首筋には、貴殿の投げた石の一撃で出来た傷跡がまだ残っています。その頃の私たちは、聖祭用の[ワインの]壺を空にしよう、教会の聖具室に忍び込むのが好きでしたね。楽しむためではなく、世の中のあれこれにうんざりしていたのです」(ロッシーニ宛の書簡、1865年)¹⁴。ジョアキーノは罰としてサントバルド広場(現在のマミアニ広場)の鍛冶屋ジュリエッティの店でふいご押しを命じられたが、素行は改まらなかった。



やがて一家に運命が微笑む。イタリア再征を開始したナポレオンが1800年6月14日にピエモンテのマレンゴの戦いで勝利し(図17)、南下したフランス軍が7月20日、ペーザロを占領して政治犯を解放したのだ。10ヵ月ぶりに自由の身となった父ジュゼッペは市のラッパ手に復職したが、政情が不安定なことから息子を残して妻と共にボローニャに行き¹⁵、同年秋のシーズンの劇場オーケストラに職を得た。そしてペーザロ市からの解雇通知を受け取るとジョアキーノを引き取り、ボローニャでの新生活が始まった。

図17 ジャック=ルイ・ダヴィドの描いた1800年のナポレオン(マルメゾン城所蔵)

ジョアキーノはボローニャで3人の修道士から教育を受け(ドン・インノチェンツォに読み書き、ドン・フィーニに算数、ドン・アゴズティーノ・モンティにラテン語)、父にホルンと歌唱を教わり、コムナーレ劇場 (Teatro Comunale) のマエストロ、ジュゼッペ・プリネッティ (Giuseppe Prinetti,?) にスピネットを学んだ。プリネッティは変人でリキュールの製造者でもあったが、ロッシーニによればベッドを持たず、夜はマントにくるまって路上で玄関の角にもたれて立ったまま眠ったという。そして朝早くジョアキーノを叩き起こしてスピネットのレッスンを始めてもすぐに眠ってしまうので、ロッシーニはベッドに戻ってひと眠りして先生を起こし、「課題はうまく演奏できました」と

言ってその日のレッスンを終えた。ブリネッティは、音階を親指と人差し指だけで弾かせたという¹⁶。ロッシーニはヴィオラにも親しみ、9歳を目前にした1801年謝肉祭にファーノのフォルトゥーナ劇場 (Teatro della Fortuna) のオーケストラで奏者を務めた記録がある (母アンナが演奏会に出演した折の出来事)。ちなみに従来文献はロッシーニ最初の作品を1801年に作曲したカンツォネッタ《もしも粉挽き娘を望むなら (*Se il vuol la molinara*)》とするが、現在は疑問視され、1808年以降の作と考えられている¹⁷。

ボローニャで劇場ホルン奏者を務める父ジュゼッペは同年10月31日、同地の音楽アカデミー (アッカデーミア・フィラルモーニカ・ディ・ボローニャ *Accademia Filarmonica di Bologna*)¹⁸の会員に「コロノ・ダ・カッチャのプロフェッソール」として選ばれたが、政治的混乱は収まらず、教皇政府が復活すれば再び逮捕される恐れがあるため、家族を連れて故郷ルーゴに移ることにした (図18)。



図18 ルーゴの父ジュゼッペの家

¹ 太陽劇場では、1790年春～97年謝肉祭に次のオペラが上演された (出典: *Luoghi e repertorio del teatro musicale nelle Marche. [a cura di Marco Salvaranti e Flavia Emanuelli], Regione Marche-Fratelli Palombi Editori, 1999., pp.105-07. (Fabbri, *I Rossini a Pesaro e in Romagna*, p.54.の上演歴は不完全で誤謬あり)*)

1790年謝肉祭 (1月): ピアスキ《誘拐された田舎娘 (*La villanella rapita*)》、ファブリーツィ《必要に法は無用 (*Necessità non ha legge*)》。同年春 (4-5月): ベルナルディーニ《ひょうきんな伯爵 (*Il conte di bell'umore*)》、チマローザ《期待はずれの企み (*Le trame deluse*)》。同年秋 (9月): スコラルト《イエフテの誓い (*Il voto di Jette*)》。1791年謝肉祭 (1月): グリエルミ《高貴な羊飼いの娘 (*La pastorella nobile*)》、ロブスキ《去勢された父子 (*Castrini padre e figlio*)》、ファブリーツィ《かつがれた2人の城主 (*I due castellani burlati*)》。1792年謝肉祭 (1月): チマローザ《絶望した夫 (*Il marito disperato*)》、アンフォッシ《幸せな旅人たち (*I viaggiatori felici*)》。同年春 (4月): 作曲者不詳《奥様女中 (*La serva padrona*)》、アンフォッシ《吝嗇 (*L'avarò*)》。同年秋 (9月): 《ダヴィッデ (*Davidde*)》。1794年謝肉祭 (1月): チマローザ《絶望した夫 (*Il marito disperato*)》、パイジェッロ《2人の伯爵夫人 (*Le due contesse*)》、作曲者不詳《恋は男を盲目にする (*Amore fa l'uomo cieco*)》。1795年謝肉祭 (1月): 作曲者不詳《アンティゴノ (*Antigono*)》、ベルナルディーニ《最後に人は希望を失くす (*L'ultima che si perde è la speranza*)》。同年秋 (9月): パイジェッロ《奥様女中 (*La serva padrona*)》、同《ニーナ、恋狂い (*Nina la pazzia per amore*)》。1796年謝肉祭 (1月): パイジェッロ《ニーナ、恋狂い (*Nina la pazzia per amore*)》、同《空想の哲学者 (*I filosofo immaginari*)》。1797年謝肉祭 (1月): ガルッピ《女悪魔 (*La diavolessa*)》、カルーゾ《試みの恋人たち (*Gli amanti alla prova*)》、同《元気のいい旅籠の女主人 (*L'albergatorice vivace*)》。同年秋 (9月): スコラルト《シザーラ (*Sisara*)》、ジンガレッリ《放蕩息子 (*Il figliol prodigo*)》

² Fabbri, *I Rossini a Pesaro e in Romagna*, pp.55-56.

³ Loschelder, *L'infanzia di Gioacchino Rossini. Conferme e complementi*, pp.33-34.

⁴ Ibid., p.35.

⁵ ジュゼッペがチザルピーナ共和国から得た報酬は3年間で約90スクード。詳細は Ibid., pp.35-36.

⁶ 1913年没とするのは誤り。

⁷ ロッシーニが母アンナや自分の少年時代について語った内容の典拠は Edmont Michotte, *Rossini e sua Madre. Ricordi della infanzia (Dalle frequenti conversazioni che ebbi con lui)*. [in *Cronaca Musicale*, anno XVII, n.5, Pesaro, 1913., pp.112-120.] (*Bollettino del Centro rossiniano di studi della Fondazione Rossini di Pesaro*, Anno XLIV 2004., pp.139-146.に再掲載)。

⁸ アンナの出演詳細は Paolo Fabbri, *Minima rossiniana: ancora sulle carriere dei Rossini*. (in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno 1987, Fondazione Rossini, Pesaro, 1988.), pp.5-23. 参照。

⁹ Michotte, *Rossini e sua Madre*, p.142.

¹⁰ フェルディナント・ヒラーによる聞き書き。Ferdinand Hiller, *Plaudereien mit Rossini*, 1855. (in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XXXII, Fondazione Rossini, Pesaro, 1992.にドイツ語原文とイタリア語訳を掲載)。

¹¹ Alexis Azevedo, *G Rossini, Sa vie et ses œuvres*, Heugel, Paris, 1864., p.21.

¹² ジョアキーノも同行したとする文献あり (a cura di Luigi Verdi, *Rossini a Bologna, note documentarie in occasione della mostra 'Rossini a Bologna'*, Pàtron Editore, 2000., p.9.)。

¹³ Giuseppe Radiciotti, *Gioacchino Rossini. Vita documentata. Opere ed influenza su l'arte, vol.I.*, Arti Grafiche Majella, Tivoli, 1927., p.13.

¹⁴ Ibid., p.15.

¹⁵ ペーザロの政局は流動的で、1800年12月6日にオーストリア軍が入城、翌年1月25日にフランス軍が復帰するなど目まぐるしく変わり、城壁の外では敗残兵たちが盗賊となっていた。

¹⁶ ヒラーへの述懐。Hiller, op.cit., p.81. 本稿では3人の修道士やブリネッティに学んだ時期を1800年の秋としたが、1799年秋とする文献もあり、正確な時期を特定する史料を欠いている。

¹⁷ 1821年にリコルディ社が出版した楽譜は「ロッシーニの最初の作品」とし、自筆楽譜にも「ボローニャ、1801年3月20日」「私の愛しいヴィガノへの捧げ物 (Offerta alla mia diletta Viganò, G.R.)」の署名があるとされる。しかし、被献呈者ヴィガノが《デメトリオとポリービオ》の台本作者ヴィンチェンツィーナ・ヴィガノ=モンベッリ (Vincenzina Viganò-Mombelli, ?-?) であれば、その出会いは1808年以降 (1808または1810年) のため疑義がある。自筆楽譜はニューヨークのピアポント・モーガン図書館 (Pierpont Morgan Library) の所蔵目録のみを典拠とし、現物は失われたらしく (Verdi, *Rossini a Bologna*, p.13. は自筆楽譜を「所在不詳」とする)、楽譜とその記載の真正性を検証できない。

¹⁸ 創立は1666年に遡る。1770年にモーツァルトも会員に選ばれ、後にロッシーニも歌手として会員となる (1806年)。